ネルヴァルにおける遅延のテーマ（1）
『シルヴィ』における遅延

Le Retard obsédant chez Nerval（1）

七尾　誠
Makoto Nanao

1．はじめに

1—1．

ネルヴァルの遺作『オーレリア』は、ひとつの秘密入信物語 une histoire intiatique にほかならない。主人公は、夢とかれの狂気がかいま見せる幻影とを試練の場として initié への道を一歩一歩たどっていくのである。

> すぐに空に見える星のうちのひとつが大きくなりはじめ、例のわたしの夢の女神が微笑みながら現れた。かつて夢で見たのと同じく、ほとんどインド風の衣装を身にまとって。女神はわたしたちふたりの間を歩み、そして牧場は緑となり、その足跡には花や葉が生えた。女神はわたしたちにこう言うのだった。「あなたが受けていた試練は、もう終わりに来ています。あなたが疲れ果てながら登ったり降りたりしていたあの無限の階段は、あなたの思いを混乱させていた過去の迷妄のくびきそのものだったのです（・・・）。」
> （*Aurélia*: p. 408）

しかし、終章で語られるこのような試練の終わりすなわち救済にいたる過程で、主人公は絶望と希望との波状攻撃にさらされつづける。絶望は、ある時は取り返しのつかない喪失感———「以下にオーレリアという名で呼ぶ、わたしが長いあいだ愛したひとりの女性は、わたしにとってうしなわれてしまった。」(1)、「再びうしなわれてしまった。もはやおしまいだ。すべては取り返しがつかない。」(2)———の形をとったり、宇宙の終末の予感———「わたしは、時が終極に達して、そしてわたしたちはヨハネ黙示録に預言された世界の終焉に近づいていると思った。荒涼とした空に黒い太陽が、そしてチュイルリー宮の上に血のように赤い球体が見えるような気がした。」(3)———という形となり、かれを苦しめる。また、希望は、絶望よりはるかに弱々しくしか現れないとはいえ、一族の不死への確信———「『やっぱり本当のことだったのだ』とわたしは恍惚としながら言った。『わたしたちは不死であり、かつて住んでいた世界の姿をここに保存しているのだ。かつて愛したもののすべてが自分のまわりに存在し.つづけるだろうと思うことはなんと幸せなことだろう。』」(4)———であったり、夢のもつ魔術的な力への信頼———「夢が精霊の世界と人間とのあいだに交流をひらくものであるという観念をいだいていたので、わたしは希望をもっていた．．．まだ、希望をもっていたのだ。」(5)———であったりもする。この絶望と希望とのあいだの振

平成元年3月22日原稿受理
大阪産業大学　教養部

幅は、しばしばふたつの極のあいだの振幅という姿のもとに現れる。すなわち、「まだ間に合う」il est temps encore と「もう遅い」il est trop tard というふたつの極のあいだを主人公は揺れ動きつづけるのである。そして、前者はつねに、現れたかと思うとすぐさま後者にとってかわられてしまい、作品冒頭から主人公につきまとう罪の意識のさらなる悪化となって、かれを苦しめる。

かれは、作品の冒頭から遅れつづける。たとえばそれは、「あとになってからはじめて明らかになる自分自身の過失」すなわち「認識の遅れ」とでもよぶべきものである。

> 最初は楽しかったこの夢は、わたしを大変な困惑におとしいれた。この夢はなにを意味していたか。それはあとになってからはじめてわかった。オーレリアが死んだのだった。はじめのうちは、彼女の病気の知らせを受けただけだった。わたしの精神状態のために、希望のいりまじった漠然とした悲しみしか感じなかった。自分自身にもあまり生きる時間が残されていないと思っていたし、愛する心と心が再会する世界の存在をそれ以来確信していたのだった。それに、彼女は生きている時よりも死んでからのほうがはるかにわたしのものだった．．．。わたしの理性がのちになって苦い後悔によって支払わなければなくなる利己的な考え。　（*ibid.*, p. 374）

また、時空間の制限という人間に課せられた条件の支配からは通常自由であるはずの夢の世界(6)においても、かれは遅れてしまう。

> 一瞬のうちに、わたしは彼女の結婚、わたしたちを引き離す呪いを思い出して、そして心に言った。「そんなことがあるだろうか。彼女はわたしのもとに帰ってくるのだろうか。」涙をうかべてわたしは聞いた、「わたしを許してくださいましたか。」しかし、一切は消えてしまっていた。わたしは、ひと気のない、森のまん中の岩の散在するけわしい坂にいた。見覚えがあるように思える一軒の家が、この荒涼とした土地を見下ろしていた。（・・・）「あそこでわたしを待っている」と、わたしは考えた。――何時かの鐘が鳴った．．．。わたしは心に言った、「もう遅い。」いくつかの声がそれに答えた、「彼女はうしなわれた」と。（*ibid.*, p. 391）

こういった主人公のさまざまな「遅れ」の局面に「もはや～しない」ne～plus という表現が多用されているのは、後述する『シルヴィ』における遅延の表現との関係において注目すべきであろう。

さて、こうして遅れつづけるかれが本当に「間に合う」のは作品全体の終盤ちかくになってからのことである。そして、この「間に合う」ことと主人公自身の救済とは以下に見るように大変密接に結びついているのだ。

> 友人のジョルジュの家で四時に約束があったので、わたしはかれの住居に向かった。（・・・）時間どおりにジョルジュの家に着き、そしてかれに自分の希望をうちあけた。（・・・）着替えをしてかれのベッドに寝た。睡眠中にわたしは不思議な幻影を見た。

女神が現れてわたしにこう言うように思われた。「わたしはマリアそのひとであり、また、あらゆる姿のもとにあなたが愛したそのひとなのです。あなたの試練のひとつひとつの度ごとに、わたしは顔をおおっている仮面のひとつを脱ぎすててきました。やがて、あなたはわたしの本当の姿を見ることができるでしょう。」　(*ibid.*, p. 399)

この「間に合う」、ことの作品内における機能についての詳しい分析は、作品全体についての分析につながるので、ここではこれ以上おこなわないが[7]、このことが次のような現象に直接結びついてることは注目に値するであろう。

すでに、わたしにとって、毎日の時間が二時間増えたように思われた。
(*ibid.*, p. 403)

すなわち、「間に合う」ことが時間の増大感覚をひきおこすのであり、逃れる術のないはずの時の魔力、すべてを無慈悲に変質させてしまう時の魔力からの脱出につながっているのである。この現象もしくは感覚の出現は、あとでふれる『シルヴィ』、すべてを変質させてしまう時の魔力を前にした無力感に支配される「喪失の物語」である『シルヴィ』との対比において興味深いものがある。

1－2.

さて、数多くの研究者によって論じられてきたネルヴァルではあるが、この遅延のオプセッシオンとそれが意味するところに注目したのは、これまでのところ、*Gérard de Nerval et la poétique du voyage* における Ross Chambers のみである。

かれによれば、ネルヴァル作品に現れる遅延とは「逃れることのできない時間性 temporalité への、そしてさらに、避けられぬ死の運命 mortalité への想起の契機」であり、ゆえにネルヴァルにおいては、時間についての認識は遅延への絶え間ないおそれという形態をとらざるをえない。そして、旅こそが時間と空間の制限という人間の条件からの脱出の手段となるはずである。だが皮肉なことに、この旅そのものが、たとえばある地点から別の地点へ移動するさいに直接の路がなく迂回しなければならなくなったり、また恒常的な旅費の不足から移動できなくなったりして、遅延の連鎖に変質してしまい、結局のところは前述の時間認識のさらなる深刻化をまねくきっかけとしてしか機能しなくなってしまうのである[8]。

2. 『シルヴィ』における遅延

短編小説『シルヴィ』は1853年8月にはじめて雑誌発表され、ついで1854年1月に作品集 *Les Filles du feu* に収録された。この作品の執筆の困難さ[9]について、ネルヴァルはたとえば『オーレリア』のなかでこう語っている。

わたしは少しずつ執筆をはじめた。そして、会心の小説のひとつを創作した。しかしながら、これは困難な仕事で、夢想や散歩の途中で思いつくままに、さまざまな紙片に、

ほとんどいつも鉛筆で書きつけたのだった。推敲はわたしの心を激しく動揺させた。発表後いく日もたたないうちに、わたしは執拗な不眠にとらわれたのを感じた。

(*Aurélia*: p. 378)

このような経緯をへて完成されたこの『シルヴィ』は、その後多くのひとたちによって研究されてきたわけだが、われわれがここで目標とするのは、遅延のオプセッシオンを軸とした考察である。全部で十四の章からなるこの作品について、以下、各章の順序に従いながら分析をおこなう。

この作品においてのみならず、さきほども少し触れたように、ネルヴァルにおける遅延は、現実の行動の遅れ（もちろんそれが中心となってはいるが）としてだけではなく、さまざまな形態をとって現れる。第1章に見られるのは、世代観のうらに隠された遅延の感覚である。これは、「生まれてくるのが遅すぎた」という意識であり、同世代の詩人、たとえばミュッセなどにも共有される[10]ものである。

その頃わたしたちは、ふつう革命のあとや偉大な治世の衰退のあとにやってくるような一種異様な時代に生きていた。もはや、フロンドの乱の頃の英雄的な情事も、摂政時代の優雅に飾られた放埒な生活も、総裁政府時代の懐疑主義と気違いじみた大饗宴も昔のことになってしまっていた。　(*Sylvie*: p. 242)

だが、「生まれ遅れ」てはいても、「まだ間に合う」のではないかという漠然とした希望は捨てられていない。結論めいて言ってしまえば、『シルヴィ』とは、結局、この「まだ間に合う」という漠然とした根拠のない希望がさまざまな局面で無残に打ち砕かれていく過程の物語にほかならないのではあるが。

それは、活気、躊躇と怠惰、輝かしいユートピアへの夢想、哲学的または宗教的な憧れ、再生へのある種の本能的な予感のまじった漠とした熱狂、そして過ぎ去った不和への心配、ぼんやりとした希望、そういったものがひとつに混ざり合って、なにかペレグリヌスやアプレイウスの頃のような時代だったのだ。　(*ibid.*, p. 242)

第2章には、前述の「認識の遅れ」がはじめてはっきりとした形をとって登場する。すなわち、主人公がひとりの女優（第11章になってからしか、そのオーレリーという名は明らかにされない）に対して現在いだいている漠然とした恋心（「恋、だがああ！それは漠とした形態への恋、薔薇色と青への恋、形而上的な幻影への恋だったのである！近くで見れば、現実の女性はわたしたちの真心を裏切るのだった。女性とは女王や女神のようでなければならず、そしてとりわけ、近寄ってはならない存在だった。」[11]）の萌芽のもととなっている高貴な美少女アドリエンヌに少年時代のかれがはじめて出会う場面において。

アドリエンヌの面影だけが勝ち残った。――それは、きびしい勉学の時間にもわたしをなぐさめ、力づけてくれる栄光と美の蜃気楼であった。翌年のヴァカンスの時になって

から、わたしはわずかにかいま見たあの美少女が家の命令で修道院で一生をおくることになったのを知った。　　(*ibid.*, p. 246)

第3章は、遅延を軸としてこの作品を考察する場合、前半におけるもっとも重要な章である。だいたいにおいて『シルヴィ』は、G．プーレの指摘[12]する以上に、前半七章と後半七章とが、同じ重さをもって対応しており、たとえば第2章の「この輪踊りのなかで、わたしは唯ひとりの少年だった。まだほんの幼いシルヴィという隣村の少女を連れてきていた。（・・・）わたしは彼女しか愛していなかった、彼女のほかには目もくれなかった――その時までは！」[13]という主人公自身の心変わりの叙述と、後半第9章の「ああ、あの頃は田舎の若者が彼女と踊ることなどなかった。彼女はわたしとしか踊らなかったのだ、それも年に一度の弓の祭りの時にだけ。」[14]というシルヴィの変心の気配の叙述とは、見事に正確に対応しているのである。ここではこれ以上詳しくふれる余裕はないが、このほかにもこういった前半と後半との対応関係は数多く見られる。論点をもとに戻せば、この第3章の重要、性は主人公自身が「忘れて」いたのに「今でも待っている」はずのシルヴィという図式が登場することにあり、前半部分全体の方向性を決定している点にある。

そういえば、シルヴィ、あんなに愛していたシルヴィを、わたしはどうしてこの三年忘れていたのだろう。（・・・）とてもかわいい、ロワジーで一番きれいな少女だった！彼女は幻影ではなく現実に生きている。善良で、きっと今でも清い心のままの彼女は。（・・・）彼女はまだわたしを待っている．．．だれが彼女を嫁にもらったりするだろう。かわいそうに！　　(*ibid.*, p. 247)

そして、「この三年」depuis trois ans という表現は、もうひとつの「まだ間に合う」という希望をも呼びさますことになる。

この三年、わたしはかれが〔伯父が〕[15]残してくれた、多くないとはいえわたしが一生暮らしていくには充分な遺産を、お大尽気取りでまき散らしてきた。シルヴィと一緒だったら、あの財産をなくしてしまわずにすんだろうに。けれども、偶然からその一部が戻ってくる。まだ間に合うのだ。　(*ibid.*, p. 247)

またこの第3章に突如洪水のように出現する時間に関する語の群れには非常に興味深いものがある。主人公の「今は何時だろう」という独白が起爆剤であったかのように、「懐中時計」、「時の神の像を戴いた振り子時計」、「管理人のところの鳩時計」といった語群が噴出する。そして、主人公自身の所有する時計は「わたしがトゥーレーヌでこの時計を買ったのも時刻を知るためではなかった」とかれが言うように、動いていないのであるから、現実の時刻を表示せず、「管理人」という他者の時計によってはじめて、「午前一時」という時刻がかれに示されるという事実は注目に値する。つまり、それまでは時間の存在しない世界、存在していても意識されない世界の住人であった主人公――時間が存在しないゆえに遅れることもない―――が、現実の時間、過去から未来へと不可逆に流れていく時間の支配する世界に

身を置きはじめたことになるのである。この意味でも、この章の重要性は見逃せないものとなっている。

この章の末尾には、ネルヴァルの読者には親しい「思い出を再構成しよう」というテーゼ(16)が現れ、つづく第4、5、6、7章の「思い出の再構成」を導くのである。そして、この「再構成された思い出」のなかにも遅延が介入してくるが、第5章におけるそれは、少しも深刻なものではなく、むしろ第6章で語られるシルヴィの伯母の家での幼いふたりの恋人たちの模擬結婚式の甘美な思い出への導入の働きをしているといえる。つまり、どうやら「再構成された思い出」の時間のなかでは、遅延もその不吉な力を発揮できないようなのである。

さて、ここで少し整理してみよう。前半部分には、たしかに「生まれ遅れた」という世代観や、「認識の遅れ」などが数回登場してきてはいるが、いずれにしても、漠然とした希望がなんらかの形でしっかりと存在している。この希望の裏付けとして機能しているのが、「まだ間に合う」という意識である。

ところが、「再構成された思い出」が支配している第4～7章から、現実の時間が支配する第8章にはいった途端に、遅延はまさしく容赦なく主人公に襲いかかりはじめる。午前一時のパリを出て約三時間の馬車の行程ののちにかれがたどりついたロワジーの村は、もうすでに祭りの熱狂をうしなっている。それは「あおざめた」bleuâtre, pâle の世界、「灯かげもあおざめてふるえるあのメランコリックな、それでいてなにかしらなつかしい時間」である早朝の、「夜鳴鶯と競った」踊りの笛も元気をなくした、「だれもかれもがあおざめて」見える世界である。つまり、現実の不可逆の時間の支配がはじまると同時に、世界は活気をうしない、疲弊した相貌を見せるのだ。そして、主人公を迎えるのは、他者から投げかけられる、悪意がないとはいえ、はっきりとした、かれの「遅れ」を指摘することばである。

> やっと、シルヴィの友だちのひとり、のっぽのリーズを見つけた。彼女はわたしに抱きつきながら言った。「ずいぶん久しぶりね。パリっ子さん！」「そう、ほんとに久しぶりだね。」「でも、こんな時間に来たの？」「駅馬車で来たんだ。」「それにしても、ずいぶん遅いわね！」「シルヴィに会いたいんだけど、まだ踊ってるの？」
>
> (*ibid.*, p. 258)

「待っている」はずの女、シルヴィのそばには、すでに「奪っていく者」が影のようによりそっているのだが、主人公はそのことに気づかない。ここで、かれは、いわば二重の「認識の遅延」をおかしているのである。すなわち、この「奪っていく者」を、この時点では「さして危険ではない」、一方的に彼女に思いを寄せている若者としか認識できない――あとで明らかになるが、すでにこの時、主人公に対して「当惑と尊敬のいりまじった態度」を示すこの田舎の若者は、シルヴィの婚約者も同然であった――のであるし、この男が、ほかでもない主人公自身の分身(17)ともいえる乳兄弟であることも、あとになってから（第12章）しか認識できないのである。

また、この章では主人公の遅延に対する明確な非難が、「待っている」はずのシルヴィからも寄せられる。ここで明らかになるのは、たしかに彼女は「待っていた」のではあるが、

「もう遅い」という事実の一端である。

「シルヴィ、もうぼくを愛していないんだね！」と、わたしは言った。彼女はため息をついた。「ねえ」と、彼女は言う。「わたしたち、分別をもたなければいけませんわ。人生には、思いどおりにならないことがたくさんあるのです。(・・・) 伯母さんの婚礼衣装を着てみた日のことを覚えていらっしゃる？. . . あの本の挿絵にも、昔の古い衣装を着けた恋人どうしが出ていたので、あなたがサン＝プルーで、わたしがジュリーだなんて思ったりしましたわ。ああ、どうしてその頃に来てくれなかったのですか！ (・・・)」 (*ibid.*, p. 259)

第8章が、シルヴィとの関係、すなわち恋における遅延がそのヴェールを脱ぎはじめる章だとすれば、つづく第9章は、その遅延の不吉さの侵犯が、主人公の故郷ともいえるこのヴァロワの土地全体にひろがっていく章である。

伯父の家を見に、モンタニーへ出かけた。その家の正面の黄色い壁、緑の雨戸が目にはいっただけで、もうわたしは大きな悲しみにとらえられた。(・・・) かつてとても愛したこの場所に帰ってくるのが遅すぎたために味わわねばならないさまざまな悲しい思いでいっぱいになり、シルヴィに会いたくてたまらなくなった。彼女こそが、わたしを今でもこの土地に結びつけている唯ひとりの若くて生き生きとした存在なのだ。
(*ibid.*, p. 261)

「今でも」encore が象徴するような、シルヴィだけを頼りとした希望はまだ捨てられてはいないのではあるが、このあとに頻出する暗くわびしい情景描写が、喪失の予感を先取りしている。すなわち、それは「廃墟」と化した「かつて伯父がよく散歩に連れて来てくれた哲学の殿堂」であり、「野草におおわれてしまった薔薇の茂み」であり、「空になったルソーの墓」、「荒野からたちのぼる悪い空気」である。そして、すでに第2章との関連において指摘しておいたように、かつての「わたし以外の他人とはけっして踊らなかったシルヴィ」はもう存在しないことを、主人公は予感せざるをえないのだ。

第10章では、具体的な遅延は登場しないが、第9章において「変質してしまった土地・風景」を前にした主人公が「今でも」encore という語とともに唯一の希望をたくした、変質・変心していず、「待っている」はずのシルヴィそのひとの変化が、しだいに、予感という不確かな形ではなく、知覚可能な明確な形をとって現れはじめる。一見、「再構成された思い出」のなかの姿となんら変わっていないように思えるシルヴィ（「昔のままの無邪気そのもののようすで、わたしを部屋にあがらせてくれた。彼女の眼は今でも変わりなく魅力にみちた微笑みをたたえていた。」(18)）ではあるが、さまざまな家具は「当世風のもの」におきかえられているし、その部屋のなかには、「なにひとつ昔のものが見い出せない」のである。また、「きれいな指ですばらしいレースを」つくっていた彼女は、今では「機械」を使用して「いいかせぎになる手袋」をつくっていることも明らかになる。ここに頻出する「もはや～しない」ne～plus は、シルヴィの変質が明白にされ、喪失の検証が具体的にはじめられる

この章全体の性質に要請されたものといえよう。

「あら、もうレースはつくっていないんですよ。、このあたりでは、だれももうほしがらないから。(・・・)」(・・・) あの年とった伯母さんももうこの世にいないのだ、とわたしにはわかった。(・・・) わたしたちは、昔とちがって、もはやあまりうちとけた会話をすることができなくなっていた。(・・・) しかし、手袋職人としの、シルヴィも、今ではただの百姓娘ではなくなっているのだということは、よく理解できた。
(*ibid.*, pp. 263-264)

そして、第6章の「再構成された思い出」のなかの「永遠に若い伝説の妖精」la fée des légendes éternellement jeune [19]は、その舞台を提供していた彼女の伯母がすでに死去していることもあって、周囲のひとをたっぷりとうるおす「なんでも巧みにやりおおせる妖精」une fée industrieuse [20]に変わってしまっているのである。

つづく第11章にも、《ne～plus》は二度現れる。この表現はシルヴィの変質を確認するという機能をはたしている。つまり、彼女は「もう古い唄はうたわない」と言って「近代オペラの大げさなアリア」をうたい、主人公は彼女が伝統的な民謡をもううたえなくなってしまうのを悲しむのである。また、この章の最後の部分には、シルヴィから発せられる「遅れてはならない」ということばが登場する。このことばは、主人公を夢想から現実に引き戻す作用をもつのはもちろん、かつての「永遠に若い伝説の妖精」が今では不可逆の時間のなかに生きていることを証明する機能をももっているといえるだろう。

「(・・・) でも、うわついたことを考えているわけにはいきませんわ。あなたはパリで用事がおありだし、わたしにはわたしの仕事があります。あまり遅くならないうちに帰りましょう。(・・・)」 (*ibid.*, p. 266)

第12章は、シルヴィと主人公との関係においては決定的な章である。まず、散歩の帰り道、かれはロワジーに着いてしまうまでにプロポーズをしようと決心するが、この最終的ともいえる希望にもかれは遅れてしまう。引用中に使用される「まだ」encore も、もはや有効性をもちえなくなっている。

わたしは答えようとした。シルヴィの足下にひざまづこうとした。まだ買い戻すことも可能な伯父の家で一緒に暮らそうと申し出ようとした。(・・・) しかし、その時には、もうロワジーに来てしまっていた。皆は、わたしたちのために夕食を待ってくれているのだ。 (*ibid.*, p. 267)

そして、「シルヴィに恋しているらしい、さして危険とも思えない」青年が、実際には自分自身の分身ともいえる乳兄弟グラン・フリゼであることが遅れて理解され、その分身とシルヴィとの噂が耳にはいるのも、また「シルヴィの心のなかにはもう自分はいない」という最終的な判断がくだされるのも、この章においてである。「その翌日、ナントゥイユ・ル・

オードワン通いの馬車は、わたしをパリへと連れもどした。」という、唐突でそっけないこの章の幕切れは、これにつづくふたつの章の叙述の時間的経過の急激さを予告している。

第13章を特徴づけているのは、すでに多くの研究者によって指摘されているように、時間的および空間的移動の激しさ(21)にある。ここまでの十二の章が、ほぼたった一日のしかもパリと近郊のヴァロワ地方とのあいだの移動の叙述に費やされているだけなのに対して、この章では、時間は風のように過ぎていき、主人公は、パリからドイツへ、ドイツからパリへ、ついで近郊のシャンチイへというぐあいに、やはり風のように移動するのである。煩雑にすぎるので、遂一引用することは避けるが、「パリへ！五時間の道のりだ」、「八時頃」、「その翌日、わたしはドイツにむかっていた」という急激な時間・空間の流れのなかに、喪失のもたらす自省的な感慨（「わたし自身の過失のために、シルヴィはわたしから去っていった」）が挿入される。また、急激さをさらに増した時間の流れのなか（「ある朝」、「数ヶ月が過ぎ去る」、「それにつづく日々」）には、女優オーレリーとの関係におけるあらたなる遅延が報告される。

> ある時、さすがに心を動かしたか、彼女はわたしをそばに呼び、わたしと会う前からつきあってきたひとりの男への思いが断ちがたいのだと、打ち明けてくれた。
>
> (*ibid.*, p. 270)

そして、さらにすばやく過ぎ去っていく時間（「二ヶ月後」、「その次の夏」）の流れの果てに、ほとんど物語全体の結論として、女優から主人公に対して投げつけられる拒絶のことばが、象徴的な《ne～plus》をともなって、置かれている。

> 「(・・・) あなたはドラマを探していらっしゃる。それだけのことよ。でも、大団円は来てくれはしませんわ。もうたくさん。これからは、もうあなたのことは信用しませんから。」 (*ibid.*, p. 271)

エピローグともいうべき最終の第14章は、そのほとんどが現在形で書かれていることもあって、これまでのさまざまな喪失体験への話者のしみじみとした諦念にみちている。「唯一の恋の両半分」をすべてうしなってしまったかれにとって、「過去のなごりをとどめていない」故郷は、中心をもたない空虚な風景しか提供しない。

> エルムノンヴィルよ！（・・・）今となっては、おまえの陰影に富んだ森も、おまえの湖も、おまえの砂漠さえも、わたしにとってなんになるだろう？　オチス、モンタニー、ロワジー、あわれな近隣の村々、――今、僧院が改築中の――シャーリ、おまえたちはあの過ぎ去った日々のかたみをなにひとつとどめていない！ (*ibid.*, p. 272)

そして、頻出する甘美なまでの憂愁をおびた語群―― triste, solitude, rêverie, les traces fugitives, en vain, eau morte que le cygne dédaigne――のなかで、《ne～plus》とともに語られるのは、この中心を喪失したかつての聖地への直接の道がないこと、すなわ

ち決定的な喪失感を確定させずにおかない最終的な遅延をひきおこす障害、迂回の必要性なのである。

> 今ではもう、エルムノンヴィルに行こうとしても、直接の道はなくなってしまっている。わたしは、時によって、クレーユとサンリスをまわったり、またダマルタンをまわったりして行くのである。　　(*ibid.*, p. 272)

すでにふたりの子供までいる現在のシルヴィと乳兄弟の夫婦に再会して、ふともらされる主人公の独白（「たぶん、わたしの幸福はそこにあったのだ。しかし．．．」[22]）のなかには、遅延から喪失へといたる悲劇をしめくくるにふさわしく、「もう遅い」という静かな、そしてそれゆえに一層悲痛な諦念が透けて見えている。

また、最後には、主人公のうしなわれた恋の対象である三人の女性の名が一斉に喚起されるとともに、1832年というこの作品にはじめて登場するはっきりと明示された日時[23]が、死という語と共鳴しあって、あたかも破壊者としての時の魔力を象徴するかのように、「認識の遅延」が現れ、この物語の幕が閉じられるのである。

> わたしはオーレリーが所属している劇団がダマルタンで公演をした日のことを言うのを忘れていた。シルヴィを連れて見物に行ったのだ。そして、あの女優と、以前知っていただれかとが似ているとは思わないかとたずねた。「いったい、だれに！」「アドリエンヌを思い出さないかい？」「まあ、なんということを！」と彼女は笑いくずれた。だが、すぐに気がとがめたようにため息をついて、こうつけ加えた。「かわいそうなアドリエンヌ！あのひとは聖S．．．の尼僧院でなくなったのよ．．．1832年頃に。」
>
> (*ibid.*, p. 273)

3．結論

さて、以上の分析で明らかなように、『シルヴィ』において、遅延現象もしくはそのオプセッシオンはさまざまなレヴェル、さまざまな形態のもとに出現し、この作品の主要モチーフである喪失の原因あるいは契機として機能している。この意味では、Chambers が提出した遅延の性格づけ———逃れることのできない時間性への、そしてさらに、避けられない死の運命への想起の契機としての遅延——は、正しいと言わざるをえない。

しかし、はたして遅延は Chambers の言うように、破壊者としての時間を再認識させる契機、いまわしい障害の象徴としてしか働かないものなのだろうか。たとえば、かれがその説の主要な根拠としている作品『東方紀行』の旅人・話者の次のような態度には、なにか遅延を楽しもうとする気配、さらには自分からまねき寄せようとさえする気配が見えはしないだろうか。

> ムラン、モントロー、ジョワニーを過ぎてオークセールで夕食になる。とくにおもしろいこともない。それでも、この旅人の軽率さを思ってもみてくれ。気まぐれすぎてほとんど真っ直ぐに行ってくれる鉄道に乗る気にならず、いつも満員で明日にならなければ

来ないかも知れない乗合馬車に身を委ねたのだから。この大胆不敵な旅人は、素晴らしい料理を前にすると、そこまで運んでくれたラフィット・カイヤールの特急馬車の発車に遅れるのに少しもあわてず、半分も食べていない夕食をおいて馬車に乗りこんだ他の乗客の不幸を憫笑するのである。(・・・) 翌日、われらが主人公は、とんでもない時間に目覚める。二日分眠ったのだから、ジェネラル急行馬車はとっくに出てしまっている。それなら、またラフィット・カイヤールに乗ればいいではないか、ということで食事にとりかかる。そして結局やって来たラフィットにはカブリオレにしか席はない。

(*Voyage en Orient*: pp. 173-174)

また、以下に引用するような旅人の姿勢——「少しも到着を急いでいない」———は注目に値する。

船長は砂に打ちこんだ杭に船をもやって、下りていこうとした。そこで、かれに、まさか目の前の村に泊まっていくつもりではあるまい、と聞いた。すると、今夜はそこで過ごし、翌日は、南西の風がおこる(まさにモンスーンの季節だった)三時までそこにいなければならないと言う。「風向きの悪い時は、綱で引っぱって動かすと思っていたが」と、わたしは言ってやった。「それは契約にはいっていません」と、かれは答えた。(・・・) それに、わたしは少しも到着を急いでいない。英国の旅行者なら憤慨のあまり飛びあがりかねないが、わたしには、たんに(・・・) あまり通られないこのあたりを、よりよく観察する機会が与えられたにすぎないのだ。(*ibid.*, p. 402)

つまり、ここでは遅延は、その不吉なはずの力を行使してはいないし、逆に、話者に「ほとんど知られていない地域を研究する機会」、すなわち知のよろこびを提供してくれさえもしているのである。

さらにまた、『シルヴィ』とほぼ同じ時期に発表された『十月の夜』と題された短編についていえば、まさに遅延につぐ遅延が、話者の言う「夜のパリにおける地獄下り」、そして逮捕、投獄という不吉な事態を生み出す直接の原因として機能しているこの物語においても、そのユーモラスで「到着を急がない」という態度は一貫して保持されているのである。

このように、ネルヴァルにおける遅延とは、けっして Chambers の主張するような一面的な性格しかもたないものではなく、これまでの一般的な硬直したネルヴァル観———純粋で、狂気の美しさにみちた、もっともロマン派的な作家であるネルヴァル——に反して、あいまいで両義的な性格、不吉であると同時に、自由奔放な夢想、さらには創作の素材の供給源でさえもあるという二面性をもっているのではないだろうか。われわれのこれまでの研究によれば、その作家生命の後半を、ネルヴァルは、純粋さへの希求をへて、雑多性への下降(それは都市における遊歩 flânerie [24] として現れる)、そして究極的には、それらすべてを包含した絶対的な自由(時間・空間の制限からの脱出)の追求へという道程ををたどったのであり、本論でとりあげた遅延のオプセッシオンは、この道程を貫通して、さまざまなモチーフの主調低音として鳴り響きつづけているのである。この意味で、前述した「よろこばしき遅延」のテーマのさらに詳しい分析研究が、今後の主要な課題として残されている。

注

ネルヴァルのテクストの引用は『東方紀行』および『幻視者たち』をのぞいて、次の版によった。
Gérard de Nerval, *Œuvres*, tome I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1974
『東方紀行』および『幻視者たち』の引用は次の版によった。
Gérard de Nerval, *Œuvres Complètes*, tome Ⅱ, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1984
本文中および以下の注では頁数のみを示す。

(1) *ibid.*, p. 359
(2) *ibid.*, p. 385
(3) *ibid.*, p. 397
(4) *ibid.*, pp. 367-368
(5) *ibid.*, p. 392
(6) この点に関して、ネルヴァルは、評論集『幻視者たち』に収められた『カゾット』の異文のなかでジョゼフ・ド・メーストルを論じながら、次のように言っている。
「人間は（・・・）時間のために作られたのではないと主張する。なぜなら、時間とは、終末にいたることのみを要求する、なにかしら強いられたものだから。こういうわけで、われわれは夢のなかでは時間の観念をけっしてもたないのだ。」（*Jacques Cazotte* p. 1750）
(7) 拙稿「ジェラール・ド・ネルヴァルにおける祝祭の観念」（待兼山論叢、XⅦ, 1983, pp. 35-50）参照
(8) Ross Chambers：*Gerard de Nerval et la poetique du voyage*, Corti, 1969, pp. 35-52
(9) 『シルヴィ』第14章冒頭で、話者自身はテクストの構成について、以下のように言っている。
「これが、人生の朝にひとの心を魅惑し迷わせる悪夢である。わたしは、それらを強いて順序立てて書きとめようとはしなかった（・・・）。」（*Silvie* p. 271）
しかし、1853年の書簡には、執筆の困難さが率直に現れている。1853年2月および7月のヴィクトリアン・ド・マルス宛の書簡参照（*Œuvres*, t. I: p. 1064 et p. 1071）
(10) たとえば、次のような『ローラ』中の詩句に共通の世代観が見られる。（下線は引用者による）
Je suis venu <u>trop tard</u> dans un monde trop vieux.
D'un siècle sans espoir nait un siècle sans crainte ;
Les comètes du nôtre ont dépeuplé les cieux.
(Choix de Poèsies de Musset — P. U. F. pp. 240-241)
(11) *Sylvie*: p. 242
(12) Georges Poulet: *Trois essais de mythologie romantique*, Corti, 1971, p. 50
(13) *Sylvie* p. 245
(14) *ibid.*, p. 262
(15) 〔 〕内は引用者による。
(16) 『十月の夜』にも、ほぼ同一のフレーズが見られる。
「われわれの思い出を組み立てなおそう。」（*Les Nuits d'octobre* p. 107）
(17) 「奪っていく者」としての分身のテーマは『オーレリア』、『東方紀行』その他、多くのネルヴァル作品に登場する。
(18) *Sylvie*: p. 263
(19) *ibid.*, p. 255
(20) *ibid.*, p. 264
(21) 時間および空間移動の叙述の急激さについては、以下に見る『東方紀行』の一文が、同様の「結びつきの不可能性」に関係して現れている点からも、注目される。
「おそらく大昔から、わたしが、この結婚するということが不条理に近いほど簡単な土地であるエジプトにおいてもシリヤにおいても、結婚できないように定められていたのだろう。族長の娘と結ばれる資格がそろそろできかけようという頃、わたしは突然あのシリアの熱病のひとつにとりつかれてしまったのだ。死にはしないまでも、何ヶ月も何年もかかる。唯一の治療法はこの土地を離れることだった。わたしは、この湿気の多いと同時にほこりっぽいハウランの谷を急いで逃げだした。（・・・）ベイルートで健康を取り戻そうと思っていたが、少ししか回復せず、トリエステから来たオーストリアの船に乗りこんで、スミルナに、ついでコンスタンチノープルまで運んでもらうのがやっとだったのだ。」
（*Voyage en Orient* pp. 599-600）
(22) *Sylvie*: p. 273
(23) 「明示された日時」に関しては、『オーレリア』の初稿（日時および人名・地名がはっきりと示されている）と決定稿（日時は明記されず、人名・地名もほとんど匿名化されている）とのあいだの差異が興味深い。なお、この点に関しては、拙稿「*Les Filles du Feu* における《幽閉》のテーマと叙述構造」（*GALLIA*, XXI-XXII, 1982, pp. 257-267）参照。

(24)「都市における遊歩」に関しては、拙稿「ネルヴァルにおける《flânerie》」(*GALLIA*, XXV, 1985, pp. 21-30) 参照